

九州地区研究会報告

原 隆 幸

第2回九州地区研究会が2013年12月7日(土)に鹿児島大学教育学部にて開催された。

研究会プログラムは、小講演が2つとシンポジウムよりなる。

小講演では、まず樋口晶彦氏(鹿児島大学)が「東アジアの言語政策の展望—EUと欧州評議会の言語政策から—」と題し、「アジア言語共通参照枠」の可能性を述べた。また、アジア全体を通じた英語教育を保障するために何らかの組織機構を設立する必要があること説き、日本だけに留まらずアジアに目を向けた言語政策のあり方を考える機会となった。次に木下正義氏(福岡大学)が、「日本・韓国の英語テストの現状—NEAT・CSATの比較などを探って—」と題し、大学受験にTOEFLを導入することの問題点を指摘した。その上でTOEFLの代替えとして韓国の「国家英語能力評価試験(NEAT: National English Ability Test)」のようなものを開発、導入することを提案し、NEATに関する理解を深める場となった。

続いて「これからの日本における言語教育政策の展望—東アジアの事例から—」というタイトルでシンポジウムが行われた。森住衛氏(本学会会長、桜美林大学)、清永克己氏(飯塚日新館中学校)、樋口晶彦氏(鹿児島大学)、原隆幸(鹿児島大学)が提案者であった。東アジアの事例として中国と韓国が取り上げられ、また、「東アジア共通参照枠」のような取り組みができるかどうかの可能性と日中韓の英語教育の事例が紹介された。さらに東アジア諸国との関係を見据えながら、教育課程を中心とする日本の外国語教育政策を振り返り、今後どのような外国語教育が必要かを考えるシンポジウムとなった。

今回の九州地区研究会では、東アジアに関する内容が中心となったが、やはり隣国に対する意識の高さの現れであると言えるだろう。参加者も大学生、大学院生から教員とさまざまであったが、日本の言語教育を外から概観し、今後、日本における言語教育政策の在り方を改めて考える機会になったのではないかと思われる。

(鹿児島大学)